

『吾輩は猫である』の猫はなぜ名無しの猫なのか？

＝「固有名詞」論＝

小 池 清 治

キーワード：固有名詞，固有名彙，橋本文法，
意味特性，恣意性，指示機能，標識機能，
命名，所属関係，意味属性，人名表記

1 固有名彙とは何か？＝固有名詞と固有名彙＝

「固有名詞」という用語は，一般的には文法用語と意識されている。しかし，英語においては確かに文法用語なのであるが，日本語においては文法用語ではない。語彙論の用語なのである。

本稿では，文法論に関する用語は従来の用語を使用して「……詞」と表現するが，語彙論に関する用語は，そのことを明示的に示すため「……彙」と表現することにする。したがって，いわゆる固有名詞は「固有名彙」となる。

英語の固有名詞についていえば，語頭は大文字で書かれ，冠詞は付けられない。また，複数形を欠くという文法的特徴を有し，文法的に普通名詞とは区別される。

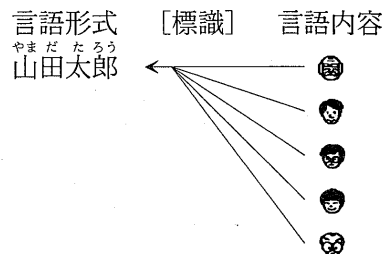
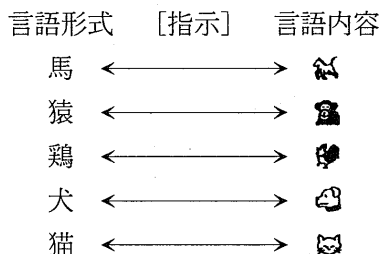
一方，日本語の固有名彙はこのような意味での文法的特性を有してはいない。

| 普通名詞 | 固有名彙 |
|--------|----------------------|
| 馬が来た。 | やまだ たろう 山田太郎が来た。 |
| | 〔主格補足成分の一部〕 |
| 馬は家畜だ。 | やまだ たろう 山田太郎は親友だ。 |
| | 〔題目成分の一部〕 |
| あれは馬だ。 | やまだ たろう あれは山田太郎だ。 |
| | 〔解説成分の一部〕 |
| 馬に乗る。 | やまだ たろう 山田太郎に頼む。 |
| | 〔依拠格補足成分の一部〕 |
| 馬の脚 | やまだ たろう 山田太郎の足 |
| | 〔連体成分素の一部〕 |

形式を重視する橋本（進吉）文法では，「固有名詞」を名詞の下位区分とし，次章で言及する

「代名詞」と同様に，独立した品詞の一つとしては数えていない。これは，上記のような言語事実に基づいた処置なのである。

固有名彙に属する単語の特徴は，言語形式と言語内容との関係の特殊性にある。

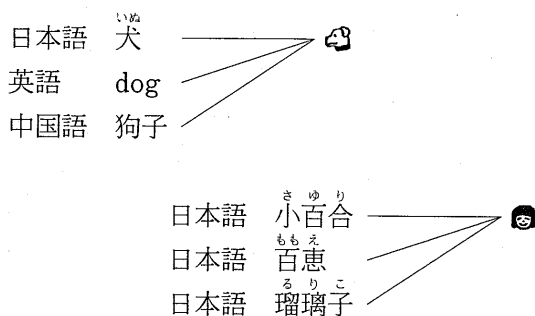


「馬」「猿」などの普通名詞では，言語形式が社会的に一定の言語内容（聴覚イメージ・類概念）を呼び起こす。このようにある言語形式が社会的に一定の言語内容を呼び起こす作用を本稿では，言語の指示機能ということにする。また，ある言語内容は社会的に一定の言語形式を要求する。このようにして，普通名詞においては，言語形式と言語内容が密接に結び付いている。日本語を習得するということは，このような社会的一定の関係を習得するということである。

一方，「山田太郎」という固有名彙は社会的には一定の言語内容（聴覚イメージ・類概念）とは結びついていない。固有名彙は指示機能を具備していないのである。ある固有名彙が社会的に言語として認められるためには，言語形式と言語内容

とを私的に臨時的に結び付ける必要がある。ある人間にどのような固有名彙を与えるかは個人の恣意にゆだねられている。固有名彙はある人間が他の人間とは別のものであることを示す標識として、まず使用され、新規に社会的に認知されることにより、言語として機能するようになる。このような固有名彙の機能を本稿では標識機能ということにする。

ところで、日本語や英語、中国語という個別言語の枠を超えて、言語一般として、言語形式と言語内容との関係をみた場合、これらの関係は恣意的関係ということになる。



そうして、日本語や英語・中国語という個別言語の枠内においては、言語形式と言語内容との関係は固定的になり、恣意性を失う。

固有名彙の面白さの一つは、言語の恣意性が個別言語においても貫かれているというところにあるだろう。

生まれたばかりの女の子に「小百合」と名付けても、「百恵」と名付けても、「瑠璃子」と名付けてもかまわない。また、これらの女の子がどのような顔形をしているかについては固有名彙は何らの保証も与えないのである。恣意性とは、言い換えると言語としての自由さである。固有名彙は言語の自由さが気がねなしに思い切り楽しめる語彙なのである。

2 『吾輩は猫である』の猫はなぜ名無しの猫なのか？ = 名付けと所属関係 =

(1) 名無しの猫という設定の特殊性

日本近代文学の傑作の一つ、夏目漱石の処女作『吾輩は猫である』(明治38年1月～明治39年8月、1905～1906)の冒頭は次のように始められている。

吾輩は猫である。名前はまだ無い。(一)

「まだ無い。」と述べているので、「吾輩」は、いづれ名前が付けられるだろうと思っていることがわかる。すべての飼い猫には、「タマ」とか「ミー」とか「ミケ」とかという猫らしい名前がつけられるのが普通であるから、「吾輩」が上記のように思考するのは極めて当然ということになる。事実、この小説に登場する猫はみな名前を持っている。筋向こうの雌猫は「白」、車屋に買われている乱暴猫は「黒」、二絃琴の師匠のところの美猫は「三毛(子)」という具合である。しかるに、「吾輩」はこの作品の最後に至っても名無しの猫のままである。「吾輩」の期待は裏切られたことになる。漱石はなぜ、このような裏切り行為をして、「吾輩」を名無しの猫にとどめてしまったのであろうか？

漱石は企み多き作家であるから、極めて不自然な名無しの猫という設定にはこの作品を読み解くための鍵の一つが潜ませられていたのではないかと思ってよいだろう。

「吾輩」の飼い主は「珍野苦沙弥」先生である。彼はすこぶる無精である。そのことは十章の冒頭部を読めばわかる。

「あなた」、もう七時ですよ」と襖越しに細君が声を掛けた。主人は眼がさめて居るのだから、寝て居るのだから、向ふむきになつたぎり返事もしない。返事をしないのは此男の癖である。是非何とか口を切らなければならない時はうんと云ふ。此うんも容易な事では出てこない。人間も返事がうるさくなる位無精になると、どことなく趣がある。(十)

猫が名無しのまま放って置かれたのは、こういう飼い主の極端な「無精」の結果と一応は考えられる。だが、それだけだろうか？ この程度のことなら「読解の鍵」などと大袈裟に考える必要はない。

(2) 「吾輩」には名前があった！ = 「野良」という呼び名 =

「吾輩」のガールフレンドに「二絃琴の御師匠さん」の主人を持つ「三毛(子)」という美猫がいる。この美猫は「三毛(子)」という名を有するばかりか、死んで「猫誉信女」という戒名まで

授けられている。「吾輩」とは格段の相違で、贅^{ぜい}沢^{たく}な猫なのであるが、登場してまもなく風邪^{かぜ}を引き、この小説が始められてすぐの二章であっけなく死んでしまう。この二章の末尾において、私たちは「吾輩」の名前の一つに接することになる。

「然^{しか}し猫でも坊^{ぼう}さんの御^お経^{きやう}を読んでもらったり、戒名^{かいみやう}こしらへてもらったのだから心残り^{ござ}はあるまい」「さうで御座^{ござ}いますとも、全く果報者^{かほうもの}で御座^{ござ}いますよ。ただ慾^{よく}を云^いふとあの坊^{ぼう}さんの御^お経^{きやう}があまり軽少^{けいせう}だった様^{よう}で御座^{ござ}いますね」「少し短^{みづか}か過ぎた様^{よう}だったから、大変^{おほい}御早^ごう御座^{ござ}いますねと御尋^{おたず}ねをしたら、月桂^{げっけい}寺^じさんは、ええ利目^{ききめ}のある所^{ところ}をちよいとやつて置きました、なに猫だからあの位^{じゆう}で充分^{ぶんぶん}浄土^{じやうど}へ行^いかれますと御仰^{おつし}あつたよ」「あらまあ……然^{しか}しあの野良^{のら}なんかは……」

吾輩^{われわれ}は名前^なはないと屢^{しばしば}ば断^{ことわ}って置くのに、此^{この}下女^{げじよ}は野良^{のら}野良^{のら}と吾輩^{われわれ}を呼^よぶ。失敬^{しっけい}な奴^{やつ}だ。(二)

「下女^{げじよ}」の「御三^{おさん}」は「吾輩^{われわれ}」を「野良^{のら}」と呼んでいる。だから、「吾輩^{われわれ}」には呼び名^ながあったことになる。しかし、「吾輩^{われわれ}」は自分の名前^なとして「野良^{のら}」を認めることをせず、作品の最後まで、名無しの猫で通している。なぜなのだろうか?

- (3) 独立した猫・文明批評家漱石のカリカチュア
= 固有名詞には所属関係を明示する機能が内含されている。=

夏目漱石の弟子内田百閒^{うちだひゃっけん}は『贗作吾輩は猫である』(昭和24年、1949)を著し、作品においても漱石の弟子であることを鮮明にしているが、この作品の「吾輩^{われわれ}」には名前がある。

内田は怪力^{きやく}というべか妖力^{まじかみ}というべきか作者の特権により、40年ほど前に水瓶^{みづがめ}で水死^{すいし}した漱石の猫「吾輩^{われわれ}」を蘇生^{そせい}させてしまう。

飼^おい主^{にやうどう}「大入道^{ごさう}」こと「五沙弥^{ごさみ}」は、友人「風船画伯^{ふうせんがはく}」の「時に先生^{せんせい}さん、この猫は何^{なん}と云^いう名前^なですか」という率直な質問に、妻である「お神^{かみ}さん」をも前にして次のように答える。

「名前^なはまだ無い」

「そりゃ不便^{ふびん}ですね」

「そうだわ、名前^なをつけてやらなくちゃ。今までだって有^あったんでしょけれど、猫^{ねこ}に聞いてもわからないから、うちでつけるんだわね」

「命名式^{めいめいしき}を致^{いた}しましょう」

「じゃあ、つけてやろうか。アビシニヤ」

「変^{へん}な名前^なだわ」

「何^{なん}だか聞いた様^{よう}な名前^なですね」

名前^ななんかどうでもいい。あんまりいつ迄^{まで}も下^{くだ}らない事^{こと}ばかり云^いうので、つくづく退屈^{たいくつ}したから、脊^せ伸び^{のび}をしたら大^{おほい}きな欠伸^{あくび}が出^でた。

「や、猫^{ねこ}が欠伸^{あくび}をしたぜ」と大入道^{おおにやうどう}が云^いった。
(第一)

内田の『贗作……』はかなりよくできた贗作^{おとこ}なのであるが、「第一」章の末尾において、すでに贗作^{おとこ}の尻尾^{しっぽ}を出^でしてしまっている。漱石の猫、「吾輩^{われわれ}」の特色の第一は名無しであることなのであるが、『贗作……』ではこの肝要な特色を簡単に放擲^{ほうてき}してしまっ、命名^{めいめい}しているからである。あえて勘^{かん}ぐりを入れれば、内田百閒^{うちだひゃっけん}は、猫^{ねこ}が名無しであるという小説の仕掛け^{しかけ}を仕掛けとして認識^{しんしき}していなかったのではないと思われる。彼は名前^なの有無^{いうへい}を便利^{べんり}、不便^{ふびん}という日常的次元^{じつじきじゆん}でしか考^{かんが}えていなかったようだ。

ところで、「吾輩^{われわれ}」は「御三^{おさん}」が使用する「野良^{のら}」という呼び名^なをなぜ拒否^{きよひ}したのであろうか。

「野良^{のら}」は「野良猫^{のらねこ}」から作られた略称^{りやくしやう}である。「野良猫^{のらねこ}」とは、「飼^かい主^{しゅ}のいない猫^{ねこ}。野原^のなどに捨てられた猫^{ねこ}。どらねこ。」(広辞苑)のことである。「吾輩^{われわれ}」が野原^のの藪^{くさ}に捨てられたことは間違^{まちが}いないが、捨てられたままではない。現在^{げん}では、立派^{りつぱ}に中学校教師^{ちゆうがっこうきし}、珍野苦沙弥先生^{ちんよこさみせんせい}に飼^かわれた、家^{いへ}のある猫^{ねこ}なのである。出自^{しゅつじ}をやや恥^はじる傾向^{けんきゆう}のある「吾輩^{われわれ}」は断^{ことわ}じて「野良猫^{のらねこ}」ではないと主張^{しやう}したかったのであろう。だから「野良猫^{のらねこ}」に由来する「野良^{のら}」という呼び名^なを許^{ゆる}すわけにはいかなかったものと推測^{すいさく}される。これが拒否^{きよひ}の理由^{りゆう}の一つでる。

それにしても、名付けられる側^{かた}が名前^なに異議^{いぎ}を申し立て、これを拒否^{きよひ}することはありうることでない。この点においても、『吾輩は猫である』における名無しの猫という設定^{ていせつ}が特殊^{とくしゆ}であること

は歴然としている。

漱石の孫娘の婿、半藤一利^{はんとうかずとし}の著書『漱石先生がやって来た』によれば、夏目家では「吾輩」を「半兵衛」と呼んでいたということのようである。事実反してまで、『吾輩は猫である』において、漱石が「吾輩」を名無しの猫のままに打ち置いた処置には深い理由があったと考えるほかない。

漱石が「吾輩」を名無しの猫のままに放置した理由はさらに深いところにあった。

下女「御三」^{おさん}は「吾輩」の真の飼い主ではない。そういう人間には名付けの権利はない。「野良」という呼び名を内田の猫と同様に「下らない事」として受け入れてしまうと、「吾輩」は「御三」のものとなりかねない。所属関係を明らかにする点においても、「吾輩」は「野良」という呼称を拒否するほかなかったのである。これが、「吾輩」が「野良」という呼び名を拒んだ真の理由なのであろう。「吾輩」が認めるであろう名前は飼い主、苦しい境涯からの救い主、珍野苦沙弥先生からのもの以外にはありえないのである。

名付け・命名という行為は、単に名を与えということだけを意味するのではない。名を授けるということは、食を保証し、寝場所を保証し、行動圏を保証すること、一言でいえば、生存権を保証するということを意味する。

五沙弥先生^{ごさみ}がその妻と友人風船画伯^{ふうせんがはく}との前で行った命名式は、野良猫に「アビシニア」という名前の標識を付け、「アビシニア」という言語形式と迷い込んだ猫という言語内容とを私的に結合させ、新しい固有名彙を生成すると同時に、野良猫を家猫・飼い猫に昇格させる行為でもあった。この命名式により、この猫は生存権が保証され、五沙弥家に所属することになったのである。

このようなわけで、固有名彙には所属関係を明示するという機能が内含されている。ところが、珍野苦沙弥先生は、この命名という行為を最後までしていない。いや、作者夏目漱石がそういう設定を選び取っている。これは、「吾輩」である猫を珍野苦沙弥に所属しない、自由の独立体として、漱石がふるまわせたかかったらではないだろうか？

自由の独立体でなければ、「太平^{たいへい}の逸民^{いつみん}」たちの呑気さと哀しさを突き放して描破する傑作は成立しなかった。名無しということは何者にも所

属しないという独立体を象徴し、一個の文明批評家としての自負を表すと同時に、哀しさと寂しさとの表明であったことになる。名無しの猫「吾輩」は文明批評家漱石のカリカチュアでもあったのだ。

夏目漱石は生まれて間もなく里子に出されている。一種の捨て子の身となったといってよい。夜店^{よみせ}の一隅に置かれた籠の中で寝ていた赤子^{あかこ}を見て、哀れを感じた兄弟の願いにより、幼い漱石は親元に引き取られている。ところが、兄弟が多かった夏目家では、父親母親晩年の子、いわゆる「恥かき子」の漱石をもてあまし、今度は本格的に養子として他家に入籍させてしまう。生存権の不安、所属関係の流動性を漱石は幼児に体験している。この体験が潜在し『吾輩は猫である』の猫として発現したというのは読み過ぎであろうか。

3 人名表記の多様性

第一節の末尾において、「固有名彙は言語の自由さが気がねなしに思い切り楽しめる語彙」と述べたが、この自由さを思い切り楽しんでいる言語の第一は日本語であると思われる。恣意性は表記の多様性という形をとって現れる。

まず、「姓」の表記の多様性を例示する。

| | | | | | |
|------|----|----|----|-----|-----|
| アイカワ | 鮎河 | 鮎川 | 会川 | 合川 | 四十川 |
| | 相川 | 藍川 | | | |
| アイザワ | 鮎沢 | 会澤 | 合澤 | 四十沢 | 相沢 |
| | 相澤 | 藍沢 | 藍澤 | 會澤 | |
| アイバ | 愛場 | 饗場 | 饗庭 | 合場 | 合葉 |
| | 餐場 | 相羽 | 相場 | 相庭 | 相馬 |
| | 相葉 | 藍葉 | | | |
| カトウ | 加登 | 加東 | 加藤 | 加頭 | 嘉藤 |
| | 河東 | 香東 | | | |
| サイトウ | 妻藤 | 斎藤 | 西塔 | 西東 | 西藤 |
| | 西頭 | 齊藤 | 齋藤 | 齊藤 | |
| ヨシカワ | 義川 | 吉河 | 吉川 | 好川 | 斉川 |
| | 芳川 | 由川 | 良河 | 良川 | 葭川 |

「四十川」「四十沢」に至っては、「四十」でなぜ「アイ」と読むのかさえわからない。次に、「名」の表記の多様性を示す。

アキオ アキオ 堯夫 暁生 暁男 暁夫
 暁雄 暁郎 啓夫 顕生 顕男
 顕夫 顕雄 晃夫 晃生 晃夫
 晃雄 秋男 秋夫 秋雄 秋郎
 彰生 彰男 彰夫 彰雄 彰朗
 彰郎 昭生 昭男 昭夫 昭勇
 昭雄 昭郎 晶夫 晶雄 祥生
 章生 章男 章夫 章勇 章雄
 章郎 詔雄 聡雄 彬夫 明央
 明生 明男 明夫 明雄 明郎
 陽夫 亮夫 廉夫 朗生 朗男
 朗雄 皓夫 曉夫 王章夫 韶夫

ヨシオ よしお ヨシオ ヨシヲ 愛雄
 佳男 佳夫 佳雄 嘉生 嘉男
 嘉夫 嘉甫 嘉勇 嘉雄 賀生
 賀男 賀夫 賀雄 快男 凱男
 凱夫 凱雄 完夫 喜生 喜男
 喜夫 喜雄 儀夫 儀雄 義翁
 義生 義男 義尾 義夫 義雄
 吉男 吉夫 吉勇 吉雄 欣男
 欽男 圭男 圭郎 慶男 慶夫
 慶雄 慶朗 元雄 侯雄 好男
 好夫 好雄 孔男 四男 至男
 至雄 叔男 淑男 祥夫 世志男
 精男 宣生 詮雄 善男 善夫
 善雄 善朗 善郎 能男 能夫
 美夫 美雄 美郎 彬男 斌男
 福郎 芳生 芳男 芳尾 芳夫
 芳雄 芳朗 由男 由尾 由夫
 由雄 由朗 由郎 与四男 与四雄
 与士夫 与志男 与志夫 与志雄
 誉志夫 誉夫 良生 良男 良夫
 良穂 良雄 良郎 佑男 禰夫
 譽志雄

ノリコ のりこ のり子 ノリコ ノリ子
 紀子 規子 記子 儀子 矩子
 憲子 師子 至子 詞子 祝子
 詔子 乗子 詮子 則子 程子
 典子 徳子 式子 乃り子 乃梨子
 乃理子 乃里子 納里子 能利子
 能理子 能里子 伯子 範子 法子

ミチコ みちこ みち子 ミチコ ミチ子
 見知子 己知子 己智子 庚子

三千子 三知子 三智子 視千子
 実千子 実知子 実智子 身知子
 通子 途子 導子 道子 美治子
 美千子 美地子 美智子 美稚子
 未知子 未知子 已知子 猷子
 融子 倫子 路子 廸子 彭子
 迪子 達子

これらを観察すると姓名を表す表記にはなんでもありという感を禁じ得ない。ことほどさように日本人の姓名の表記は多様である。この多様さを生み出すものは、固有名彙の恣意性にあるだろう。

姓でいえば、「鴨脚」で「いちょう」（銀杏・公孫樹）、「一口」で「いもあらい」などの難訓姓、名でいえば、「羽一音」で「ハイネ」、「六月介」で「ジュンすけ」など親や本人以外には読めそうにない表記は珍しいことではない。これらは恣意性の極といってよいだろう。日本の戸籍法では、人名漢字など、姓名に使用する文字に関しては規定があり、規制されるが、許された文字を使用していれば、それらをどう読むかは自由なのである。法的にも、自由さは保証されているのである。

参考文献

- 1) 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典 第6巻 術語編』（三省堂、1996）
- 2) 小池清治・小林賢次・細川英雄・犬飼隆編『日本語学キーワード事典』（朝倉書店、1997）
- 3) NTTコミュニケーション科学研究所監修池原悟他編集『日本語語彙大系1 意味体系』（岩波書店、1997）
- 4) 池上嘉彦著『意味論』（大修館書店、1975）
- 5) 鏡見明克「固有名詞」（『講座日本語1』明治書院、1982）
- 6) 鏡見明克「名称学と命名論」（『日本語学』10巻1号、1991）
- 7) 木下守「持続と邂逅－森鷗外と史伝形式」（『国語と国文学』181 巻2号、東京大学国語国文学会、2004）
- 8) 寿岳章子著『日本人の名前』（大修館書店、1979）
- 9) 田中克彦著『名前と人間』（岩波新書472、岩波書店、1996）

- 10) 石崎等著『夏目漱石 テクストの深層』(小沢書店, 2000)
- 11) 夏目漱石著『吾輩は猫である』(漱石全集 1, 岩波書店, 1993)
- 12) 内田百閒著『贋作吾輩は猫である』(内田百閒集成 8, ちくま文庫, 筑摩書房2003)
- 13) 半藤一利著『漱石先生がやって来た』(「人物文庫」学陽書房, 2000)
- 14) 柄谷行人「固有名をめぐる」(『探求Ⅱ』講談社学術文庫1120, 講談社, 1994)
- 15) 出口顕著『名前のアルケオロジー』(紀伊国書店, 1995)
- 16) 石原千秋「名前はつけられないー固有名をめぐるー」(「国文学解釈と教材」2004年1月号, 學燈社, 2004)

(2004年5月18日受理)